The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞宗教者災害支援連絡会編,『災害支援ハンドブック宗教者の実践とその協働』
Author(s)	佐々木, 美和
Citation	共生学ジャーナル. 2017, 1, p. 105-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

宗教者災害支援連絡会編
蓑輪顕量・稲場圭信・黒崎浩行・葛西賢太責任編集
『災害支援ハンドブック　宗教者の実践とその協働』
春秋社、2016 年、258 頁

佐々木 美和*
Miwa SASAKI

1. はじめに

もしいま、この大阪の地で災害が起こってしまったら――評者は逃げた先できっと、本書を開く。それは、支援をするときの「智慧」が、本書に詰まっているためだ。「ハンドブック」と銘打たれた本書の本質がここにある。

災害は、起こるときには、起こってしまう。もしものことが起こったときに、頼りになるものは何だろうか。そのひとつは、同じ思いを経験したひとからの言葉に違いない。本書はタイトルの通り「災害支援」の現場に携わる方々による言葉が半分以上を占めている。本書を読むことで、実際の災害現場での苦悩、宗教者ならではの活躍を知ることができるだろう。災害支援を専門とする者にとってだけではなく、そうでない者にとっても、興味深い一冊であることは間違いない。本書の冒頭では災害救援の現場に精通する研究者の渥美公秀も、「期待」の言葉を収めている。災害多発国の日本に住む者なら誰でも読むべき一冊であり、また宗教者らの災害現場での活躍が注目されている昨今(1)において、注目に値する一冊である。

実は評者が本書を手に取ったとき、タイトルがなぜ「ハンドブック」なのだろうかと内心疑問だった。本書は災害時に読んだからといって、たとえば、即座に緊急手当ての方法を処方できるようなハウツー本ではない。しかし本書には、当事者になって初めて「知っておけばよかった」と感じる、蓑輪が本書内で述べているところの経験からくる深い「智慧」（p.4）が集められた、災害時における支援についての必携本であるといえる。

2. 本書の構成

本書は主に、「宗教者災害支援連絡会（以下、宗援連）」で報告された内容を「今後の参考に資する」ため「災害の備え」となる「智慧」を残そうという目的のもとまとめられたものである。宗援連とは、東日本大震災発生直後の、2016 年 4 月に発足した宗教者たちによる情報交換会のようなものであ

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系（m.kuro-neko@hotmail.com）

る。以降 5 年間、定期的に報告会を持ち活動を続けている。参加者の中には、もともと被災現場に住んでいた宗教者の方や、災害以降に現場に入った宗教者など様々であるが、共に現場での経験と課題を共有し、また乗り越えてきた経緯を交換してきた。その軌跡である「智慧」をまとめたものが本書である。

本書は 3 つの部から構成されている。第一部は「東日本大震災で起こったこと」であり、過去の実践の記録がリアルに書かれている。第一部の冒頭では、本節の冒頭で述べたとおりの本書執筆の動機とねらいが記されている。そのねらいを達成するため、本書の前半には豊富な実経験が書かれてある。頁数としては全体の 254 頁中 120 頁もが割かれている。「智慧」を残さねばならないという思いが伝わってくる。思いが伝わるだけではなく、もし読者が同様の経験をしたときに役に立つようにと書かれた内容であり工夫が凝らしてある。

たとえば、これらのページでは、各々信仰の異なる宗教者らがオムニバス形式で実体験を書いているが、各々ページのはじめでは、簡単な要約と宗教者のプロフィールがかかれている。このマークは読者にとって読みやすい。読者はこのマークをしおりのようにし、実体験のページを自分の必要に応じて引くことができる。いわば辞書の目次のような感覚である。有事には、自分と同じような体験をした方からのアドバイスや実録を参考にしたく、何度も読むこととなるのではないだろうか。また、「智慧」を残し伝えたいという思いを執筆者一人一人が持っていることが伝わってくる。たとえばある執筆者は次のように記している。

> ここで、これからを担う皆さんへ、留意すべき点を、思いつくままに少し箇条書きにしてみます。（中略）決断しなければならないことが、一時に大量に押し寄せてくるのですから、（中略）ここにあげたことのその先まで思い描いて、（中略）前に進んでもらえればと思うばかりです（p.100）。

「決断しなければならないことが、一時に大量に押し寄せてくるのですから」という言葉をはじめ、当事者にしか言えない「智慧」が第一部には豊富である。興味深いのは、これらの言葉から、宗教者のみならず彼らを取り巻く異なるエージェントや環境が見えることである。宗教に携わらない者にも本書が有意義であろうと言えるのはこの点にもある。

次に、第二部「東日本大震災から考える」では現状の把握や客観的な事実の考察を行っているようであり、現時点で日本全国のどれくらいの自治体が宗教施設と協力体制にあるのかなどの現状把握が行われている。また、東日本大震災での記録を踏まえた上で、現在宗教者らが実践すべき「心のケア」

は何か、信仰と支援の関係などについて、課題と考察を述べている。ここでの考察さえも、飽くまで当事者の視点や、経験をした者からの考察が多く、震災の痛みを知らない研究者からの言葉ではないものが多い。また、東日本大震災で見えた日本という国における宗教と行政の関係なども考察されており興味深い。さらに、第二部の内容は支援を実践する者にとって、災害の備えとして実際に役に立つ内容が豊富に収められている。たとえば「救済マップ」など、いま実際に使えるツールなどが紹介されている。

最後に第三部では、今後の展望を描く形となっており、本書全体が「1. 事例」「2. 反省・再考」「3. 提言」のように全体的にすっきりとまとまっている構成である。

本書の構成は、前半で災害における宗教の役割について具体的な実経験を述べ、後半で学術的客観的な議論を展開しているという点と、災害とひとというテーマが中心という点で言えば、國學院大學が発行している『共存学 2』と類似している。しかし『共存学 2』は災害と宗教の関係だけでなく、テーマが幅広く日本の自然現象や政治学的、経済的な視点も盛り込まれている。本書は災害と支援について宗教者の働きと連携の実践が中心にされ、本書一冊だけで「災害の備え」の手引き書として当事者に役に立つような感覚がある。この点は『共存学 2』とは大きく異なる。さらに大きく異なるのは、前半の実践の記録において本書は異なる宗教の宗教者からの実体験が書かれている点である。『共存学 2』では著者らが國學院大學の方々であるということもあり、神道よりに視点が限られていた。

3. 本書の立ち位置

本書の内容は、どのような学術的レベルの読者に対しても興味深く、またわかりやすく書かれているだろう。また重要なのは、宗教者について賞賛を並べている本ではないということである。事例に多くの頁を割いており当事者の情緒的な部分を無視せずにいる姿勢と並んで、冷静に具体的な課題および課題に即した行動の提言が行われている。執筆者の中には、宗教の実践者が数多いが、それだけではなくニュートラルな立ち位置の災害支援の実践者も含まれているため、宗教者の災害支援について、多角的な視点を得ることができる。災害支援について、宗教者の視点から書かれているという点だけでもまれであるが、ある一定の宗教の視点に偏ることなく、当事者としてのミクロな視点と研究者をはじめとした執筆者による客観的な視点とが両方備わる実践提言がおこなわれている本は非常にまれであろう。本書はその貴重な 1 冊であるといえる。

ただ指摘されうるとするならば、前半の事例において、執筆者の宗教団体の種類にバランスが欠かれているということだろうか。世の中に存在する

すべての宗教団体について取り上げることは不可能であるし、何よりも本書は宗教者災害支援連絡会の編集であるため、そこに参加していない団体が取り上げられることは難しかったであろう。また、当事者でない研究者が読む際、前半における数多くの宗教者の実践の記録は、ミクロに偏り情緒的過ぎると思われるかもしれない。

4. おわりに

本書は、災害支援のエージェント／アクターとしての宗教や信仰の存在の重要性を改めて認識させられる良書である。災害支援の第一人者である渥美公秀だけでなく、宗教社会学の第一人者である島薗進をはじめとした研究者も執筆している。宗教社会学、日本文化、自然災害、組織の運営、まちづくりの分野などに関わるものには特に、またそれ以外にも多様な研究分野の研究者にとって興味深い一冊だろう。

注

(1) たとえば、今年 2016 年 4 月に発生した熊本地震においても、NHK や産経新聞をはじめとしたニュース・メディアにおいて、宗教者や信仰を持つボランティアの活躍が報道された。東日本大震災以降の宗教者らの活動についても、宗教関係の情報誌のみではなく、『市民活動総合情報誌ウォロ』など市民活動についての情報誌などでも情報発信がなされている。

参照文献

渥美公秀 2014『災害ボランティア 新しい社会へのグループダイナミックス』東京：弘文堂。

国際飢餓対策機構 2016「吉田スタッフが熊本へ、NHK 大阪ニュースで報道」http://www.jifh.org/news/2016/04/nhk-3.html（2016/11/28 アクセス）

國學院大學研究開発推進センター編・古沢広祐責任編集 2014『共存学 2』東京：弘文堂。

産経 WEST 2016「海外からも支援の輪『人としてできることを』海外ボランティアが家の片付け 被災した高齢夫婦『心が支えられた』http://www.sankei.com/west/news /160423/wst1604230051-n1.html（2016/11/28 アクセス）

中田万葉 2016「特集 被災コミュニティと宗教」『市民活動総合情報誌ウォロ』508:5-6。